

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 伊藤由希子

本論文は、平安時代の仏教説話集『日本国現報善悪霊異記』（以下『日本霊異記』）を、編者景戒の倫理思想として捉え、その思想内容をテキスト内在的に明らかにしようとする試みである。論者は、因果応報をめぐる出来事の記録の中に、編者自身の体験が説話化されて組み込まれているという『日本霊異記』の構造に着目し、説話集を編纂し、人々を善に導こうとする意識的な営みそのものを、自己と超越をめぐる一つの「思想」として読み解いていく。

論者はまず、「奇事」を因果の現れとして受け止め、驚く人々のひとりとしての景戒の自己把握のあり方を分析する。景戒を含めた人々にとっての「今・ここ」としての「日本」は、仏法から隔てられた「末法辺土」であるが、同時に、仏法が現前しつつけている場所でもある。人々は、現前する奇事を因果応報の出来事として教え示す「聖」なる存在を媒介として、「凡人」としての自己を見いだす。(序、及び第一章)

第二章では、因果の出来事への驚きとして「凡人」としての自己が自覚される体験の構造が、仏像霊験説話を手掛かりに分析される。「奇事」を因果の現れとして感知することにおいて、人々は、無意識のうちに、衆生をあわれみ、悲しみの対象として捉える超越者の視点から、自己自身を捉え直している。「聖」なる存在の視点を介した自己発見は、人々にとって、「慚愧」の感情として経験される。

第三章では、あわれみ（「慈」「愍」「矜」）と慚愧の感情が、出来事に触れた人々の間で共有され、それが、出来事を説話として伝聞する人々へも広がっていく構造が明らかにされる。そして、超越者の視線（あわれみ）と、「凡人」の自覚（慚愧）が次々と連鎖していくことにおいて、人々が、結果的に仏法の救済の働きに参加していることが明らかにされる。

第四章では、編者自身の体験が説話化され、他の説話と並んで記録されていることの意味が解かれる。即ち、因果の出来事に驚き、それを人々に知らしめていく景戒の営みそれ自体が、仏法の働きに身をゆだねる善行の意味を持つことが示される。

以上、本論文は、個々の説話に示される出来事の内実と、それを記録する営みとを一体のものとして読み解き、『日本霊異記』の世界を、景戒の「懺悔・発露」の思想として統一的に捉える可能性を示したものとして、高い評価に値する。一方で、解釈上の議論がある箇所についての詰めに十分でない点が見られること、また読みの構造にかかわる原理的な議論においてなお補強が必要な部分があるなど、問題がないわけではない。とはいえ、日本思想の根本問題の一つである、自己の自覚と求道的行為との結びつきを、具体的事例に即して明らかにしたことの意義は大きい。

以上により、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判定する。